金研先達との出逢い物語

きんけんものがたり

中国との学術交流 1
中国科学代表団の訪日

京都大学名誉教授（1964-85 金研に勤務）
小岩　昌宏

中日兩國科学家之間的深切友誼

葛庭燧

写真1.科学通報1956年4月号

写真2.橋口隆吉教授（東大工）を訪問中の葛庭燧教授（右,1955年12月）

金研には海外から多くの研究者が訪れ、諸外国との交流が盛んである。なかでも中国との交流には長い歴史がある。今回から3回にわたって、金研における中国との学術交流に関して記録に残しておきたい事項を述べる。

1955年12月、中国科学院の郭沫若院長を団長とする中国科学代表団が学術会議（当時の会長:茅誠司）の招待で来日した*。代表団員は文学、古代史、近代史、考古学、教育学、数学、物理学、生理学、土木工学、鉄道、薬学を専攻する11名であった。その一人、葛庭燧**（Ting Sui Kê）は最年少（当時42歳）の団員で、東大、東北大、京大、阪大、広島大、九大などの物理、金属関係の研究所、学部を3週間にわたって視察した。その報告書が「中日両国科学家之間的深切友誼」という題で科学通報1956年4月号64-67ページに掲載されている。その中で、東北大学金属材料研究所について述べている部分を以下に訳出する。

日本は金属物理の研究に関して光栄ある伝統を有している。有名な金属学者本多光太郎が創設した東北大学金属材料研究所は、すでに40年の歴史を有している。---

現所長は磁性合金の研究と発明でよく知られている増本量である。---　私どもは実験室で研究者が熱心に実験している様子を見、感銘を覚えた。しかし、実験設備は古く実験机がところ狭しと並んでいて、これでは実験がやりにくいのではないかという感じがした。研究所には大変腕のよいガラス工が5、6人おられたが、その工作室はトタンぶき木造の粗末なつくりであった。---

日本訪問から帰国して2ヶ月あまり経ったが、多くの日本の友人から手紙をいただいている。東北大金研の増本所長からは「このたびの代表団の日本訪問は日中両国の科学と文化交流にとって画期的な出来事であり、両国の永久の友好を衷心より願っている。代表団より贈られた刺繍は所長室に飾って代表団訪日の記念としている。」旨の便りがあった。

Ting Sui Kêは中国清華大学を卒業後、米国に渡りシカゴ大学金属研究所で内部摩擦に関する先駆的な研究をした人である。1949年、乞われて新生中国に帰り、瀋陽に設立された中国科学院金属研究所において研究を続け、後には副所長もつとめた。しかし、1966年にはじまる文化大革命の嵐に翻弄され、研究中断のやむなきに至った。文革後の新たな歩みの中で安徽省合肥市に新たに設立された中国科学院固体物理研究所の初代所長の重責を担った。1979年11月、水上温泉で開かれた「金属中の水素」国際会議に参加のため来日したKêは金研を再訪し、また電磁気材料研究所に増本量所長を訪問して旧交を温めている。

筆者は日本学術振興会と中国科学院の交流協定により、1983年10月に中国を訪問しKê先生の回想を詳しくうかがう機会を得た。その記録は日本金属学会会報の寄稿した。Kê先生は上述の訪日報告書について「増本　量所長は、私の報告書を文部省に見せて、設備更新や建物新築の予算獲得に成功したそうだ。だから私は金研にとって大恩人のはずだ」と冗談半分に仰っていた。

＊この代表団に通訳として同行した人の随行記が訳出･出版されている。ただし、通訳は郭沫若団長と行をともにしたようで、この訳書には東北大訪問に関する記述はない。劉徳有 著　村山孚 訳「郭沫若 日本の旅」サイマル出版会、1992年。

＊＊葛庭燧（1913-2000）
中国科学院院士。日本金属学会名誉員。

文献：小岩昌宏:“中国科学院固体物理研究所を訪ねて　聞き書き―内部摩擦事始め”日本金属学会会報　23（1984）291-296。

写真3.金研を再訪した葛庭燧教授（1979年12月）